

「わたしが罰しないだろうか」

エレミヤ書 5 章 1-31
2023.08.20
公文光

本日共にお読みするエレミヤ書 5 章は一貫して、イスラエルは罰せられるべきかどうかという問いを追求しています。もちろん、罰せられるべきであるというのが答えであります。その理由は人にも分かるものであり、「アーメン」と言えるような内容です。

しかし、それは他人事だから簡単に言えるという面があります。いざ、私たちが同じであると言われて罰せられたならば、イスラエルの民と同様、「われわれの神、主は、何の報いとして、これらすべてのことを私たちにしたのか」と抗議するのではないのでしょうか。罪というのはそれに陥っている人には分からないものなのであります。

私たちはエレミヤ書を正しく読むのであれば、それが自分たちも言われる可能性があると思っていなければなりません。

1 節

エルサレムの通りを行き巡り、さあ、見て知るがよい。その広場を探し回って、もしも、だれか公正を行う、真実を求める者を見つけたなら、わたしはエルサレムを赦そう。

神の命令は預言者エレミヤだけでなく、その預言のことばを聞いた者に向けられていたようです。冒頭の「行き巡り、さあ、見て知るがよい」は原語において複数形の命令であり、エレミヤ個人にではなく、複数の人に向けられています。

このことばを聞いた者は、会った者一人一人にじっくりと向き合い、その人はどのような人なのかを知ることが求められました。探した結果として、そこに公正を行い、真実を求める人が一人でもいたのであれば、エルサレムを赦すということが語られています。ここで言われる「赦す」というのは「全員の罪を赦す」ということではなく、罰をすぐに与えることはやめるということです。神は一人でも真実を求める人がいればその町にはまだ希望があると見做しました。

続く箇所を見ますと、そのような人はいなかったということが分かりますが、それは意識して人の行いを見ていれば分かることでした。

しかし、民は質が悪く、民の状態を見定めるのは簡単ではありませんでした。民は自分たちがきよい民であるかのように偽っていただけでなく、実際に自分たちはきよいと確信していました。つまり、偽善的だったのです。そのような偽善に騙されないよう、神は注意を促します。

2 節

彼らが、主は生きておられる、と言うからこそ、彼らの誓いは偽りなのだ。」

イスラエルにおいては、誓うときに「主は生きておられる」ということばを言ってから誓うことにより、神の名によって誓う習慣がありました。現代で言う「神に誓って～」という言い方と似ています。

ここで言われているのは、「主は生きておられる」と言っていること自体が、誓いが偽りだという証拠であるということではなく、偽りに満ちた人が敢えて「主は生きておられる」と言うのであれば、その誓いは偽りであるということが明瞭だということでもあります。

よって、もっとも真実を語ることを求められる時にさえ、それができていない民の姿がそこにあったのです。神を

意識していても偽りが口から出てくるのです。口先では立派なことを言っていたようですが、内実が伴っていない、謙遜さもない、下品な信者の姿であります。当然、そこには救いはありません。彼らはもはや未信者よりもモラルがなかったのではないのでしょうか。私たちも同様に、神を信じていると口で言うのであれば、良い実を結んでいなければなりません。

それにしても民は、もし意識的に真実を語ろうとしてもそれができないのであれば、民には希望はあるのでしょうか。

3 節

「主よ、あなたの目は 真実に届かないのでしょうか。あなたが彼らを打たれたのに、彼らは痛みもしませんでした。絶ち滅ぼそうとされたのに、彼らは懲らしめを受けることを拒みました。彼らは顔を岩よりも硬くして、立ち返ることを拒みました。」

このことばはエレミヤが真実を求める人を探した後でしょうか。神に偽りが見抜けないかのように振る舞う民を念頭に「主よ、あなたの目は 真実に届かないのでしょうか」とエレミヤは問います。答えはもちろん「届きます」です。神の前で偽善は通用しません。したがって、神の審判はすべて正しいのであります。

ところが、事態はさらに深刻であったということをエレミヤは見透かしていました。神は偽善的な民を正そうと彼らを懲らしめたにも関わらず、それをすべて無視していたと言うのです。自分たちは正しいと思い込んでいたからです。そんな民に果たして、赦しの道は残っているのでしょうか。

エレミヤはまだ若く、全員が神に背いているとは想像できていませんでした。自分の仲間だと思っていた人たちがいたからです。

4-5 節

⁴ 私は思った。「彼らは、卑しい者たちにすぎない。しかも愚かだ。主の道も、自分の神のさばきも知らない。
⁵ だから、身分の高い者たちのところへ行って、その人たちと語ろう。彼らなら、主の道も、自分の神のさばきも知っているから」と。ところが彼らもみな、くびきを砕き、かせを断ち切っていた。

エレミヤは、希望があると思われる者が思いつく限り、「エルサレムに真実を求める者がいないのか」という問いを、追求し続けます。しかし、追求すればするほど、神のさばきの正しさが証明されるばかりなのであります。別の視点から申し上げますと、神がこれまでどれほど忍耐強くエルサレムを罰せずに、民の立ち返りを待っていたのかが明らかになったとも言えます。

それにも関わらず、民は自分たちがさばかれようとしているとはまったく考えていませんでした。神が人を罰するのはけしからんと言う声が現代においても聞こえてくるのですが、問題はむしろ、心が偽りに満ちた結果、自分がさばきの対象となり得るということが分からなくなった状態に人間はなり得るといえます。敢えてそのような人の特徴を述べるのであれば、それは「たくましき」であります。3 節では「顔を岩よりも硬く」する形でその強さが現れます。5 節においては、「くびきを砕き、かせを断ち切る」その姿が強さであります。彼らはまったく神を恐れていません。

その結果、民の上に神の守りはなくなります。

6 節

そのため、森の獅子が彼らを殺し、荒れた地の狼が彼らを荒らす。豹が彼らの町々をうかがい、町から出る者をみなかみ裂く。彼らは背くことが多く、その背信がすさまじいからだ。

ここで語っているのは 4-5 節と同様にエレミヤなのか、7 節以降と同様神であるのかはつきりしません。新改訳では 7 節からカギ括弧があり、そこから神のことばが始まるかのようになっていますが、カギ括弧は原文にはありません。このような曖昧さはエレミヤ書においてよく見られます。

しかし、誰が語っているのかという視点自体間違っているのかもしれませんが。エルサレムを行き巡り、その背信の実態に気付いた預言者エレミヤは神の思いを理解するようになり、もはやエレミヤの思いと神の思いは区別できません。たとえ、これはエレミヤが言ったことであつたとしても、神はそれに「アーメン、その通り」と言って同意したのではないのでしょうか。

7-9 節

⁷ 「これでは、どうして、あなたを赦すことができるだろうか。あなたの子らはわたしを捨て、神でないものによって誓っていた。わたしが彼らを満ち足らせると、彼らは姦通し、遊女の家で身を傷つけた。⁸ 彼らは、肥え太ってさかりのついた馬のように、それぞれ隣の妻を慕っていななく。⁹ これらについて、わたしが罰しないだろうか。——主のことは——このような国に、わたしが復讐しないだろうか。

神はエルサレムを赦すことができるのか。赦すことを考えれば考えるほど、怒るべき事実が思い出されたのであります。実に、神は裏切られても民に祝福を与え続け、満ちし続けたのです。しかし、それで民は立ち返ろうとは考えず、かえって、その不遜な態度を助長するばかりでした。その結果、我慢の限界が来て、怒りの時が来ようとしていたのであります。

ここで一点だけ分かりにくい点がありますので、解説を加えておきます。7 節後半の「彼らは姦通し、遊女の家で身を傷つけた」は文字通りの売春を指すのか、偶像礼拝を指すのか、議論があるところです。旧約聖書においては、偶像礼拝が不倫に例えられることはよくあります。とくにこの頃、カナン神であるバアルを礼拝していたことが問題となっていました。バアル礼拝には性的な儀式が伴っていた可能性があり、実際には偶像礼拝と売春が区別できないほどの状態であつたかもしれません。

ただし、民はバアルを礼拝しているという意識はなかった可能性があります。実際にエレミヤ 2 章では、「私は汚れていない。バアルの神々に従わなかった」と訴える民の姿があります。気付いたらイスラエルの礼拝が形式

的にしか残っておらず、内実的にはバアル礼拝となっていたということではないかと思われるのです。7 節では「あなたの子らはわたしを捨て」と神は宣言していますが、イスラエルは捨てていないと信じていたのであります。

10-11 節

¹⁰ ぶどう畑の石垣に上り、それをつぶせ。ただ、根絶やしにしてはならない。そのつるを除け。それらは主のものではないからだ。¹¹ 実に、イスラエルの家とユダの家は、ことごとくわたしを裏切った。——主のことば

イスラエルのぶどう畑は山の斜面にあり、それらは石垣を使って棚田(たなだ)になっていました。その石垣を崩し、ぶどうの木をつるを除くようにという命令があります。それは、エルサレムが一度滅びるということでした。崩された石垣の最中にただぶどうの木の本だけが残った姿を想像していただくと、これからイスラエルに起きようとしていたことが分かりやすいでしょうか。それは、民が神を裏切った結果でした。

しかし、ぶどうの木というものはつるを切っても、根絶やしにしない限り、つるはまた伸びてくるものです。つまり、ここで言われる「根絶やしに」しないということは、ぶどうの木にたとえられるイスラエルの次の世代はイスラエルを再建することが許されるということです。

12-13 節

¹² 彼らは主を否定してこう言った。『主は何もしない。わざわいは私たちに襲わない。剣も飢饉も、私たちは見ない』と。¹³ 預言者たちは風になり、彼らのうちにみことばはない。彼らはそのようにされればよい。」

イスラエルは罰せられるべきなのかという問いを追求すると、何故イスラエルに希望がないかということがよく分かる事実が浮上してきます。それは、真の預言者が語る主のことばを否定していたからです。わざわいが来ると預言しても、それはないと断言して、安心しきっていたのであります。忍耐を持ってわざわざ警告しているにも関わらず、イスラエルはそれを無視していたのです。

13 節にはイスラエルの偽預言者たちのことが語られています。彼らはしきりに「平和、平和」と良いことばかりを語っていましたが、そのことばは風のように実態のないもので、彼らもいつか風のように消えると言われていました。

神の警告を無視したその凶太さは、民に対する罰が実際に下される決定的な理由となりました。

14-18 節

¹⁴ それゆえ、万軍の神、主はこう言われる。「あなたがたがこのようなことを言ったので、見よ、わたしはあなたの口にあるわたしのことばを火とする。この民は薪となり、火は彼らを焼き尽くす。¹⁵ イスラエルの家よ。見よ。わたしはあなたがたを攻めるために、遠くの地から一つの国を来させる。——主のことば——それは古くからある国、昔からある国、その言語をあなたは知らず、何を話しているのか聞き取れない国。¹⁶ その矢筒は開いた墓のよう。彼らはみな勇士たち。¹⁷ 彼らは、あなたの収穫とパンを食らい、あなたの息子と娘を食らい、羊の群れと牛の群れを食らい、ぶどうといちじくを食らい、あなたが拠り頼む城壁のある町々を 剣で打ち破る。¹⁸ しかし、その日にも——主のことば——わたしはあなたがたを滅ぼし尽くすことはない。

よく訓練された、必殺の弓術を持つ軍隊がイスラエルを攻めると神は宣言します。風のような実態のない平和を語る偽預言者たちのことばとは違い、神のことばには実態が伴い、必ずイスラエルを焼き尽くします。

全体の内容は分かりやすいのではないかと思います。一点だけ解説いたします。15 節にはその敵の言語について、「その言語をあなたは知らず、何を話しているのか聞き取れない国」と書いてあります。これは、「目には目を、歯には歯を」という原則を表しているのではないかと思います。といのは、神が何を語っても何もイスラエルには通じませんでした。まるで神が別の言語を話しているかのように神を無視するイスラエルに対して、神はことばが通じない異国の軍隊のように迫ってきます。つまり、自分たちが神にしてきたことが返ってくるのであります。

そして同時に、この敵国というのは、イスラエルの仲間でした。イスラエルは異国の神々を愛したので、同じよう

な神々を信じる者たちが彼らを迎えに来たのであります。ちょうど良い罰が与えられました。

19 節

『われわれの神、主は、何の報いとして、これらすべてのことを私たちにしたのか』と尋ねられたら、あなたは彼らにこう言え。『あなたがたが、わたしを捨て、自分の地で異国の神々に仕えたように、あなたがたは自分の地ではない地で、他国の人に仕えるようになる。』

神のさばきにもそれなりのメッセージがあったのですが、神はイスラエルがそのメッセージを聞き取る耳がないと判断していたようです。むしろ、民は罰せられても尚、すべて神のせいにしようとするのです。彼らは神を礼拝してきたつもりであり、軽い罪はあったにしても、ここまでされるようなことはしていないと確信していました。

さきほど民の特徴として「たくましき」があると申し上げましたが、その根底には偽りがあるのです。民は集まって偽りばかりを語ってきた結果、自分たちの真の姿が見えなくなっているのです。通常感覚が麻痺し、神の言うことを聞くことができないのです。神とのコミュニケーションを経た状態と言うべきでしょうか。

20-25 節

²⁰ ヤコブの家にこれを告げ、ユダに言い聞かせよ。²¹ さあ、これを聞け。愚かで思慮のない民よ。彼らは目があっても見ることができなく、耳があっても聞くことがない。²² あなたがたは、わたしを恐れぬのか。——主のことば——わたしの前で震えないのか。わたしは砂浜を海の境とした。それは永遠の境界で、越えることはできない。波が逆巻いても勝てず、鳴りとどろいても越えられない。²³ しかしこの民には、強情で逆らう心があった。それで彼らは離れて行った。²⁴ 彼らは心の中でさえこう言わなかった。『さあ、私たちの神、主を恐れよう。主は大雨を、初めの雨と後の雨を、時にかなって与え、刈り入れのために定められた数週を守ってください』と。²⁵ あなたがたの咎がこれを追いやり、あなたがたの罪がこの良いものを拒んだのだ。

5 章前半では、イスラエルをさばくべき客観的な理由が述べられていましたが、ここではより内面的な状態が問

題とされています。先ほど、その内面の状態を一言で「感覚の麻痺」であると申し上げましたが、その結果として神を恐れることさえもできない状態に民はあったのです。神が怖いと思っていなかったのです。22 節において神は「わたしの前で震えないのか」と問い、民の異常な態度に神は啞然としています。

この世には、神が恐ろしいと分かるようなことはいくらでもあります。ここでは海のことと、刈り入れのことが挙げられています。誰が見ても恐ろしいことであります。しかし、悪い世代にはそれが分からなくなってしまうのです。現代人も海は自然の力により、神と関係ないと考えて、偽っているのではないのでしょうか。人間は感覚的に分かるべきこと、いや、分からないのであれば責任が問われるようなことがあります。そういう感覚は簡単に麻痺してしまうのです。

さて、ここまで、「民は罰せられるべきか」ということを追求する中、民には真実を求める者がいないということが分かりました。さらに、彼らは偶像礼拝をし、頑なであったということ、そして、神のことばを拒んでいたということが確認されました。つまり、民には罰せられるべき理由はいくらでもあったのです。もはや問題は、「罰する理由があるのか」ではなく、「罰さない理由となり得る、なんらかの希望はあるかどうか」という問題にすり替わっていたと言っても良いでしょう。しかし、民は神に聞くこと自体を拒んで、聞く能力さえもなくなってしまう以上、罰さない理由もなくなってしまうと言えます。

しかし、ここではさらに別の問題が出てきます。誰がどう見ても早く「罰さざるを得ない理由」があったのです。民の間ではひどい悪事を働く者が幅を利かせていたのです。

26-28 節

²⁶ それは、わが民のうちに 悪しき者たちがいるからだ。彼らは野鳥を捕る者のように待ち伏せし、罟を仕掛けて人々を捕らえる。²⁷ 鳥でいっぱい鳥かごのように、彼らの家は欺きで満ちている。だから、彼らは大いなる者となり、富む者となる。²⁸ 彼らは肥えてつややかになり、悪事において限りがない。孤児のために正しいさばきをして 幸いを見させることをせず、貧しい人々の権利を擁護しない。

ここで言われているのは人攫いのことか、人に借金を抱(かか)えさせて奴隷扱いにしていたということなのかは、議論があります。私は文字通りの人攫いが起きていたのではないかと考えています。外国人や、貧しい人や、右も左も分からずに育ってしまった孤児を正義の名の下で捕まえてきて、彼らを更生させるという大義名分を立てて、奴隷のように扱って儲けていたのかもしれませんが。とにかく、このようなことが社会的に非難されていたのではなく、公に行われていたようです。それは、もとを辿れば神の律法を捨ててしまったことに起因していました。民には正義に見えていることであっても、神にはひどい悪事に見えていました。もはや、神と民の基準は乖離しすぎていて、民は神の民とは呼べない状態でありました。

29 節

²⁹ これらに対して、わたしが罰しないだろうか。——主のことば—— このような国に、わたしが復讐しないだろうか。

神はまだ最終的な判断に至っていないものの、もう審議の最終段階に入っていました。神の正しい審判が民に下されようとしていましたが、民は平和だと言って、能天気にごろごろしていました。しかし、民にとってのささやかな日常は、神にとってはおぞましいことに見えていました。

30-31 節

³⁰ 荒廃とおぞましいことが、この地に起こっている。³¹ 預言者は偽りの預言をし、祭司は自分勝手に治め、わたしの民はそれを愛している。結局、あなたがたはどうするつもりなのか。」

結局のところ、もっとも責任を負わされるのは神のことばを語る責任を担っていた預言者や祭司たちでした。預言者は神のことばを語らず、自分の心から出てくる偽りを語っていました。民が聞きたいような良いことばかり語っていたのです。祭司はみことばを語るよりも、自分の権力ばかりを気にしていました。その結果として、神のことばが消え、民は神のことが何も分からなくなっていました。

だからと言い、民も責任逃れすることはできません。彼らがそのような指導者たちを選び、その教えを愛していたのであります。

神は最後に問います。「結局、あなたがたはどうするつもりなのか。」これは、さばきがきた時に、結局どうするつもりなのかと問うています。民の行動は意味不明であり、すべてを知るはずの神にさえも民の考えが分からなくなってしまったということではないでしょうか。

本日は 5 章を共に読んで参りましたが、読めば読むほど、神のさばきが正しいと分かるのではないのでしょうか。冒頭では民を擁護していたエレミヤもついには民を弁護することができなくなったようです。

しかし、人間である限り、同じような状態に陥る可能性は私たちにもあります。民の礼拝は気づいたら現地の神、バアルを対象にした礼拝になっていたのと同様、私たちの礼拝対象も、気づいたらキリストではなく、慈愛に溢れるお釈迦さまにすり替わっている可能性があります。人間は簡単にそうなるからこそ、真の神を礼拝するのは難しいのであります。

注意すべきことは、罪に陥っている人は、それになかなか気付けないという点です。他人には適用できる基準が、自分には適用できなくなってしまうのです。そして、自分の正しさを確信してしまい、完全に心が頑なになってしまっただけではもう希望はありません。それがイスラエルの民の状態でした。

確かに、罪人は自分の状態は直接分かりません。しかし、周辺的なことで気づき得る罪の症状はあるのではないかと思います。その中で、本日のテキストから出てくることを二つだけ申し上げます。

まず、みことばが分からなくなってしまうと、誤魔化して分かっているかのように振る舞っていると感じる場合、それは罪の兆候ではないかと思われれます。イスラエルの偽預言者たちは様々な偽りを預言していたようですが、

結論はいつも同じでした。それは、「平和」でした。私たちも、聖書のどのみことばを読んでも、毎回同じような「めでたい」結論に到達するのであれば、それはイスラエルが陥っていた状態と同じ状態ではないかと思われまゝす。神のことばに関心がないからこそ、自分の思いが先行し、「平和」という結論しか出て来ないのであります。それは、神とのコミュニケーションを絶ってしまった心が頑なな状態なのです。

次に、神が怖いと思っていない状態も一つの罪の症状であります。「あなたがたは、わたしを恐れぬのか」という神のことばを共に読みましたが、「平和、平和」と念じてきた結果、人間として当然あるべき恐れが消え去ってしまっている人は、まさしくイスラエルと同じ状態ではないでしょうか。そのような人は感じるべき恥や罪悪感さえも「平和」ということばでかき消されてしまい、何も感じずに生きているのです。

しかし、そうであったならば、勇気を持ってそうであったと認めれば、僅かな希望が見えてくるのです。しかし、感覚が麻痺してしまった人、つまり「目があっても見ることがなく、耳があっても聞くことがない」人が通常感覚を取り戻すのは簡単ではありません。心が偽りに満ちていて、心に自分に都合の良い「平和」という概念しか思い浮かべられません。その偽りが正常の人間的な感覚を奪い、神を恐れようとしたところで、何も感じませんし、それがどういうことか検討も付かないのです。22 節に書いてあった通り、そのような人を見て、神は、「わたしの前で震えないのか」と問うのであります。

もしこのような状態に自分があるのであれば、まず、感覚を取り戻して素直にならなければなりません。そのためすべきことは一つです。それは、今まで覚えてきたみことばについての知識をすべて捨てることでもあります。今までの生き方に少し手を入れれば済むような段階はもう過ぎ去っています。これはそれほど深刻な状態なのです。一度すべてリセットし、先入観なしに、一人間として神の前でみことばから学ぶのです。神の基準を知るため、またその警告を聞くためにみことばを読むのです。そうすれば、人間としての当たり前感覚が戻ってくる可能性が出てきます。

そもそも、神に対する恐れは努力して引き出すものではなく、人間として自然にあるべきものなのです。「わた

しの前で震えないのか」と神が問う時、当たり前なことができていないことが問題とされているのです。同様に神の公正や真実を求めることについても、求め方があるのではなく、本来、生きていれば求めざるを得ないような事柄であります。

これ以外にもすべきことはたくさんありますが、まずは一度すべてリセットするところから始めるべきでしょう。そのようなへり下った姿が、みことばを大切にし、「公正を行い、真実を求める者」に近づくための第一歩となるからであります。

今日も神は、世界中の教会、そして国々を見て、そこに真実を求める者がいるのかを探しています。もし私たちがその基準に達しないことがあったとしても、神からの警告が発せられた時、私たちは自ら自分の状態に気づき、警告を聞き入れ、神の前にひれ伏すものでありたいと思います。その日に備えるためにも通常の「神が怖い」という感覚があるかどうかを確認するところから始めていくことができればと願います。

祈り:さばき主である神様。

本日はあなたのみことばから、あなたは忍耐強く、民を罰するべきかを考えておられたことを学びました。そして、あなたのさばきは常に正しいということを確認しました。しかし、私たちもイスラエルの民と同じような状態に陥る可能性は常にあり、簡単にあなたのさばきに「アーメン」とは言えません。

どうぞ、手遅れになる前に、私たちに自分を吟味する勇気をお与えください。あなたの前で恐れあまり、震える者となれますよう、お導きください。

イエス・キリストの御名によりお祈りいたします。アーメン。